

国旗から見るセカイ

聖光学院高等学校 2年 福嶋陸人

私は幼い頃より、「国旗」が好きだった。

そう、「国旗」だ。

だって国旗って、それぞれの国がそれぞれの国をある一つの四角の中に表そうとしている、そういうチャレンジの賜物なんだ。(ネパールなんていう掟破りの形をした国もあるが) もちろん国旗を見ただけでその国の全てがわかるわけではないが、そこには確実に、その国の人々の文化やアイデンティティ、思想が詰まっている。

だからこそ、国旗は世界を知る上で最も手っ取り早い方法だと、私は思っている。

我が国の国旗は世界でも選りすぐりのシンプルな国旗だ。

白地の真ん中に赤い円が一つ。なんとなく見たらどういう国家か全く検討もつかないかもしれないが、ここは想像力の出番。

赤い円は太陽を表してるのかな、情熱を表してるのかな。白地はなんか神聖な雰囲気がするなあ。これだけ洗練されたデザインなのはなんでなのだろう。

とこう考えるだけでも、なんとなくだが、その国の国民性みたいなものがなんとも形容しがたい形で掴めてくるのではないだろうか。

そう、国旗を見るには想像力が必要なのだ。

そしてこれが楽しいのだ。

もう一個例を挙げよう。

緑地に黄色いひし形。その中には青い天球のようなものがあって、星がいくつか瞬いている。これはブラジルの国旗だ。

この色使いだけでも、なんとなくそのお国柄が掴めるとは思わないだろうか？

そしてこの国旗には「ORDEM E PROGRESSO」という文字も書かれている。

意味は、「秩序と進歩」。これが国旗に刻まれているということはすなわち、ブラジルにおいて最も重んじられている概念が「秩序と進歩」だということ。

その意味を考えてみるだけでも、少しその国家の成り立ちが掴めるような気がする。

と、国旗はこれまで述べたように、対外的な自国のアピールの手段としても極めて有効でありその意図を込めて制作されたものであるが、それと同時に、いやそれ以上に、国旗というのはその国の人々のものである。つまり、国旗は対外だけでなく対内的に、国民が自分たちを国家とたらしめるために制作されたものでもあるのだ。

この感覚はそのほとんどが同一民族であり数千年の間大規模な異民族の流入のない島国日本の国民である我々にはなかなか馴染みのないものかもしれないが、国家というのは、必ずしも一つの民族だけが集まって出来たものではない。肌の色も文化も何もかも違う人々が、

世界と並び歩くために手を取り合って国家を作る。

そのとき重要な「国家としてのアイデンティティ」の一つを担うのが、国旗だ。

多民族国家の政府は国旗の特性を逆手に取り、その「国民性」を新たに形作るのに国旗を用いた。

たとえば多民族国家の代表的存在、アメリカ合衆国はその名の通り州が合衆した国家であるから、その横縞と星の一つ一つが州を表している。

そのため、アメリカ国旗は入植を進め州が増えるごとにデザインが変更されてきており、現在のものは27代目にもなる。

そんなアメリカ国旗には、イギリスからの独立を果たした当時の自由への喜びや強い執念、そして戦いへの勇敢さなどが込められている。

この世にない新たな国家を樹立するとき、そのスタートは常にある国旗と共にあるのだ。

これまで紹介してきたように、国旗にはあらゆる境遇のあらゆる人々が、その国の繁栄を願って作り出した様々な意味や願いが込められている。

いくらでも奥の深いジャンルなのだ。

是非、皆さんも国旗を眺めて、世界の表面に触れてみてほしい。

もっと簡単なものでも構わない。

十字のついたスウェーデンやデンマークではキリスト教が信じられているんだな、三日月があしらわれたアルジェリアやトルクメニスタンはイスラム国家なんだな。

そんな気付きがあるだけでも、少し世界について詳しくなれたような気がしてくるはずだ。